

中世京都の堀について

山本 雅和

1. はじめに

畿内の一周辺地にすぎなかった京都盆地に、都市が築かれ、人口が集中し始めるのは、8世紀も終わろうとする頃であった。今はまだ、我々は平安京造営以前の景観について想像をめぐらせることしかできない。それほど平安京の造営は大きな出来事だったのである。その後、京都の町は千年を越える年月を都市として機能し続け、幾多の歴史に残る事件の舞台となってきた。

平安京・京都があった現在の京都市域も、全国各地と同様、近年の開発行為にともなう遺跡調査が数多く実施されてきている。ところが、調査で見つかる遺跡は長年にわたる人々の生活の積み重ねが大地への働きかけとして残った結果、いろいろな時代の遺構・遺物が重複した状況で立ち現れる。大胆に一言でいえば、「複雑な遺構・膨大な遺物」が京都の遺跡を特徴づけているといっていよう。

遺物についての研究は、土器や瓦を中心にして進み、絶対年代の比定には意見の相違を残しながらも、組列はほぼ完成され、精度の高い編年も可能となった⁽¹⁾。さらに、遺物の研究から、生産・流通・消費の問題についても議論ができるようになってきた。しかしながら、遺構に対する研究には困難が多く、他の中世・近世の都市での成果に比較して、往時の景観や様相を明らかにするには至っていない。そこで本稿では、遺構からの研究の第一歩として、遺構として残りやすい溝・堀を対象として集成し、考察を加えることによって、中世京都の復原に向けての手がかりとしたい。

さて、平安京・京都の景観については、古代から近代への都市民衆の成長、あるいは、都市景観の変動を明らかにする過程で、文献資料はもとより、絵画資料、現在に残る町名や地籍図などをも用いて考察が加えられてきた。大まかに言えば、平安京右京域の衰退、左京域および有力社寺門前の発展、応仁の乱後の上京・下京の成立、豊臣政権・徳川政権による町組の改造といった流れが明らかにされている⁽²⁾。

中世京都の景観については、1967年に木下政雄氏が町組の復原図を発表したのを端緒として、高橋康夫氏の復原図に結実するにいたっている⁽⁴⁾。最近では町組の内部の構造をさらに詳細に検討しようとする気運も高まってきた⁽⁵⁾。溝や堀は、町割の区画の施設や「構（かまえ）」の一部として注目すべき要素である。

一方、調査で発見した溝・堀からの研究としては、玉村登志夫氏のものがある⁽⁷⁾。玉村氏は地下鉄烏丸線の建設にともなう調査で検出した堀から旧二条城を復元し、同時に当時の市街地に道路の側溝とは別の堀があり、それが記録に残る「構」の一部であることを指摘した。京都市中の城

郭については、その後、足利健亮氏⁽⁸⁾、森島康男氏⁽⁹⁾らにより聚楽第や徳川氏の二条城とその城下の復原がなされている⁽¹⁰⁾。一方、永田信一氏⁽¹¹⁾、堀内明博氏⁽¹²⁾は溝・堀の集成を行なった。しかし、これらは洛中全体を囲うと考えられている「惣構」を意識し、大規模な堀を抽出して取り扱ったため、網羅的なものとはなっていない。

そこで本稿では、調査で発見した、鎌倉時代から江戸時代初頭にかけての溝・堀をできるだけ集成し、検討を加えることとする。また、地域は現在の京都市域を対象とすることとし、必要に応じて隣接地域の動向も参照することにした。この範囲には当時の市街地と周辺の農村部が含まれる。これらの境界は時代によって変動するだろうが、おおよその目安として便宜的にそれぞれを「洛中」・「洛外」と呼び分けることとした⁽¹³⁾。

2. 堀の出現

平安京が造営される以前、京都盆地の中は鴨川・天神川・桂川などの河川の造った自然堤防や扇状地が広がる中を、中小の河川が流れ、一部には低湿地も広がる景観であったことが想像できる⁽¹⁴⁾。市内各所での発掘調査においても、平安時代の整地層の下から、河川や湿地の跡を確認している。そうした自然の地形を改変して平安京が造営された。

平安京には、条坊制に従って東西・南北方向にまっすぐな堀や溝がはしっていた⁽¹⁵⁾。東西の堀川や大路・小路の側溝、平安宮を囲む大垣の堀や屋敷地を区画する溝などである。造営以前の河川は計画的な水路に組み替えられ、京中にはこれらが連結した水路網が形成されたにちがいない⁽¹⁶⁾。平安宮の堀や大路・小路の側溝については、『延喜式』「京程」の記載を元に復原したモデルには整合する遺構を、市内各所で確認している⁽¹⁷⁾。これらの溝は時代が下がるにつれて道路の中心側へ移動していくこともあるが、その場合も元の方向に平行する方向を順守する。一町の内部については、『延喜式』には「四行八門制」という区画割があったとされている⁽¹⁸⁾。調査で検出する一町の内部の溝は、大部分が平安京内の条坊制の方向に沿って、東西方向ないし南北方向を向いているので、宅地割についても大路・小路を基準とした条坊制の影響は受けざるを得なかったことがわかる。しかし、四行八門制の規格に一致しない例も多く、実際の宅地割には国家の定めた制度が細部にまではおよばなかったのであろう。

ここでは、平安時代の平安京内の溝のあり方として次のことを確認しておく。

- ①平安京域では、大路・小路の側溝は条坊制に則り、東西・南北方向にのっていた。
- ②一町の内部では、四行八門制は必ずしも貫徹していなかったが、屋敷地の区画や屋敷地内の区画の溝は、条坊制の影響を受け、東西・南北方向にのっていた。

一方、起源については、まだ、定説をみていないようだが、日本各地で建物の周囲に堀を廻らせた武士の居館が平安時代に出現している。畿内でも平安時代終わり頃には確実にあったことが分かっている⁽¹⁹⁾。平安京内では、この時期の居館を囲う堀のような大規模なものは発見できていない。しかし、洛外に目を転じると、鴨川の東側、現在の七条通りと大和大路通りの交差点北西側(京都国立博物館の西側)の調査例がある(85地点)⁽²⁰⁾。調査地は鎌倉幕府の六波羅探題南庁の推定

地にあたっている。調査では南北方向の2条の堀と、それらにはさまれた部分に西面する門および土塀の痕跡を確認した。堀は2条とも幅2mを越える当時としては大規模なものである。これが六波羅探題の施設とすれば、この堀の成立を鎌倉時代前期に推定することができる。あるいは、武士勢力の京都への浸透を考えれば、これをさかのぼり、平安時代後期頃には平氏の館が建ち並んだ、六波羅や西八条に堀の出現が遡る可能性も考えてよい⁽²¹⁾。

以上のことから、平安京・京都の近郊においては、遅くとも鎌倉時代前半には、用水や区画を主な機能とした溝とは異質な防御的な性格を備えた堀が、武士によって持ち込まれた可能性を指摘することができる。この後、溝・堀には大きくは水路・区画に加えて防御という用途が期待され、囲う対象や目的によりそれぞれの用途、あるいはそれぞれの用途が複合した機能を果たしたのである。

3. 洛外の堀

調査で確認した洛外の堀は、洛中の四周に散在している(図1)⁽²²⁾。時期は鎌倉時代から戦国時代にわたっており、中でも室町時代に盛行したようである。しかし、一つ一つの堀が機能していた期間は概して短い。

洛外の堀は次の3つの型式に分類することができる。

- A：居館・寺院を囲むもの
- B：集落を囲むもの
- C：主に水路としての機能を担うもの

A型式はさらに立地から、a：山間部に立地するものと、b：平地に立地するものに細分することができる。まずA a型式について。これは山城にともなう施設と考えている。京都盆地は、西・北・東の三方をなだらかな山々に囲まれており、山頂や斜面には応仁の乱以降戦国時代にかけて次々と山城が築かれた。その数は記録に残っているだけでもかなりのものが知られている⁽²³⁾。これらの山城は、山中に築かれたことから開発の手を逃れたため、堀や郭の痕跡を現地にとどめていることも多い。A a型式の堀は戦時の防御を目的とした砦の施設と考えて間違いない。ただし、発掘調査が実施されたことはないので、詳細には触れないでおく。

特定の建物群を囲うA b型式には、囲う対象が居館の場合と寺院の場合があるが、遺構からそれらの本質的な違いを指摘することは、現状では難しい。居館を囲む堀の具体例には、一乗寺松田町遺跡隣接地の調査例(46地点)⁽²⁴⁾・鳥羽離宮東殿跡の調査例(45地点)⁽²⁵⁾・上久世城内遺跡の調査例(22地点)⁽²⁶⁾がある。

一乗寺の調査例(46地点)では、方形に廻ると推定できる堀の北西部を長さ10mあまりにわたって検出した。角の部分はやや丸みをおびている。堀の幅は約1.2mで、断面形は逆台形をなす。一部に自然石を並べていた。護岸施設であろうか。時期は室町時代。この地域は、室町時代には土豪の渡辺氏の地盤であったことが記録に残されており、調査地の北東には渡辺氏の居館跡が小さな丘の上に残っている。この堀が渡辺氏に関係するものかどうかは特定できないが、そうした

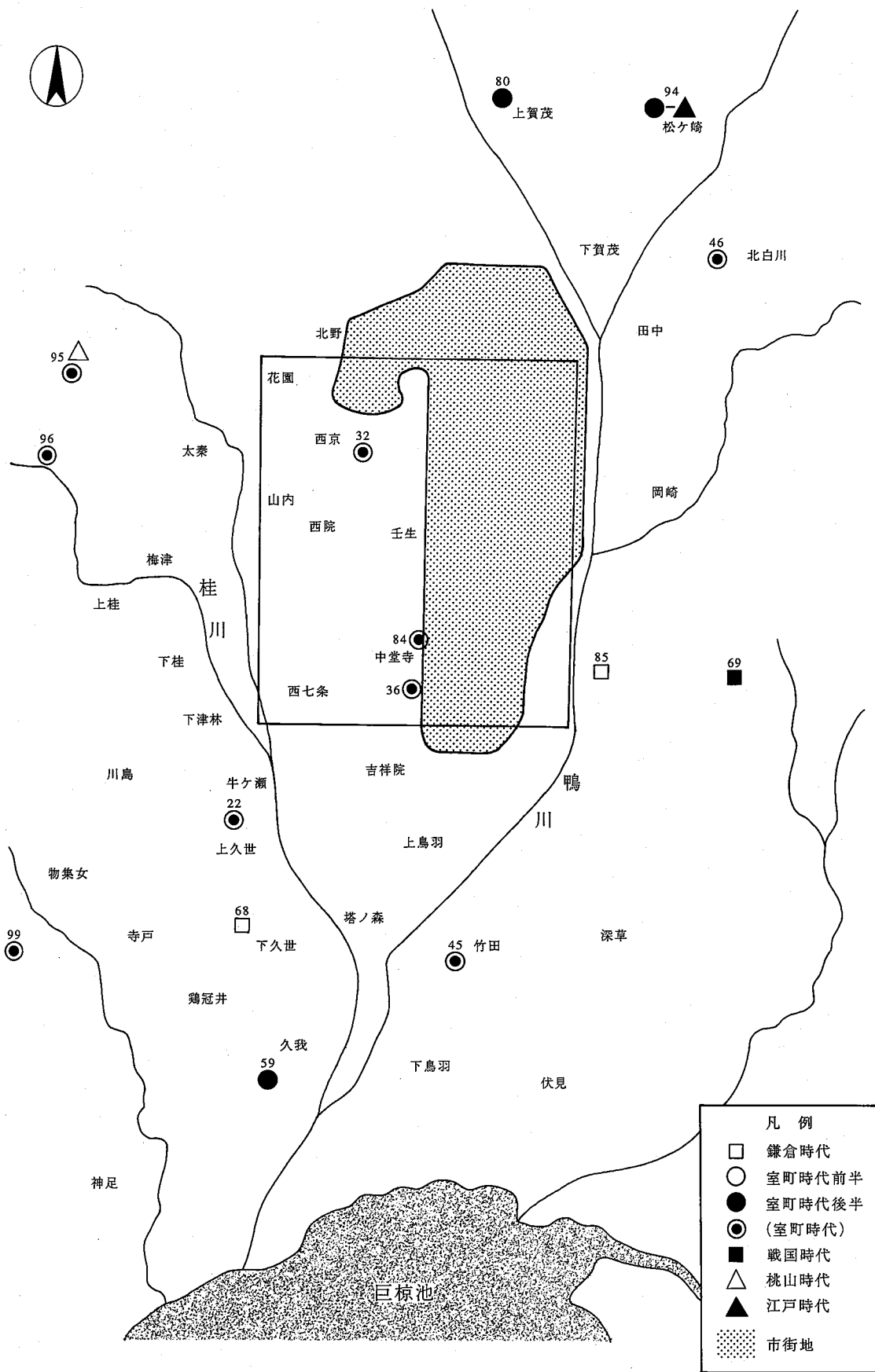


図1 洛外の主な集落と堀の分布

土豪の居館の跡の一つと考えたい。

鳥羽離宮東殿跡の調査例（45地点）は、現在の竹田内畑町にある。鳥羽離宮期の遺構面の上層で検出した。調査地は竹田城という竹田氏の居館の推定地にあっている⁽²⁷⁾。調査では未調査部分をはさみながらも、区画整理前の道路に沿った形で、南北方向に約40mの長さの堀を検出した。南端は隅丸形にやや鈍角をなして東に屈曲する。幅は約3mで、断面はU字形をなす。堀の東側には、これと同等もしくはやや小さめの東西溝が全部で4条連結する。いずれも室町時代に属する。南北堀の東側では、一棟一棟の建物の復元はまだできていないが、堀と同時期の柱穴を検出しており、やや堀からは離れているが、北東側で実施した鳥羽離宮跡第130次調査でも、蔵と考えられる建物の基礎を発見している⁽²⁸⁾。以上の状況から検出した堀は、方形の居館の西辺および南西角部分であり、東西溝は居館の内部の区画と考えることができる。

上久世城内遺跡の調査例（22地点）は、遺跡名に現れているとおり、字名が「城の内」とい、従来から居館の跡と推定されていた⁽²⁹⁾。調査区北端で東西方向の堀、これから分岐して南方向へのび、調査区南端近くでほぼ直角に東へ曲がる堀を検出している。双方とも北から約15度東に傾く。北側の堀は北岸を検出しておらず、幅は8mを越えてしまう。自然流路の可能性も指摘されている。南北の堀は幅約6mで、南側では底が2段になっており、二つの堀が重複している可能性もある。時期は鎌倉時代後半から室町時代前半。調査では南北堀の東側に、庇をもつ大型の建物や2間四方の総柱の建物を含む、建物群を検出していることから、これらの堀は、方形の居館の北・西・南を囲むものと判断できる。また、南北堀の西側でも掘立柱建物を検出しており、居館の堀の外側にも集落が広がっていたことがわかる。

寺院を囲う堀の例には、大覚寺（95地点⁽³⁰⁾）・嵐山（96地点⁽³¹⁾）・松ヶ崎妙泉寺（94地点⁽³²⁾）・山科本願寺（69地点⁽³³⁾）の調査例がある。大覚寺（95地点）では現在の本堂（寢殿）の西側で室町時代前半にさかのぼる有栖川の旧流路を検出した。有栖川はこの時期に付け替えられたのである。ほかにも桃山時代の幅10mの東西方向の堀を検出している。

嵐山（96地点）の調査では、現在の天竜寺の南側で2条の堀を検出している。共に北から約80度東への傾きをもち、調査地周辺の地割にのっていることが分かる。最初の堀は幅約1.5m・深さ約1.1mで断面は逆台形をなす。これが室町時代になると付け替えられ、深さはそのまま幅が2倍から3倍になる。断面形も2段に落ちる逆台形となり、内側となる南側の肩の一部は石を積んで補強される。堀の南側には蔵の跡と推定できる石敷き遺構も検出している。2条の堀は、当初は区画として造られたものが、防御的な性格を付与されて造り替えられたのである。

松ヶ崎妙泉寺（94地点）では石垣を検出している⁽³⁴⁾。妙泉寺は法華宗の寺院で、寺域は現在、松ヶ崎小学校の中に取り込まれている。調査では数回にわたって造り替えられた10ブロックの石垣を検出した。もっとも古い石垣は東面・南面するもので高さは1mを越える。この石垣に取りつく石垣が後に増築されるが、裏込めには土器と共に焼土が含まれており、最初の石垣が天文法華の乱で妙泉寺が焼けた時のものであることが分かる。したがって最初の石垣は16世紀前半には構築されていたこととなる。ただし、対になる反対側の石垣は検出できていないので、堀ではなく

石垣のみの施設であった可能性がある。

山科本願寺は、文明10年（1478）年の蓮如による建設の開始以来、天文元年（1532）に法華一揆を中心とする軍勢によって破壊されるまで、一向宗の本山であった。絵図にも描かれ、最近まで当時の堀や土塁が残されていた。開発によりかなりの部分が破壊されたとはいえ、一部は今も見ることができる⁽³⁵⁾。山科本願寺は御影堂を中心として三重の堀と土塁で囲まれており、内部には寺内町が形成されていた。現存する土塁の幅は10mから20mあり、最も高い部分では比高が9.2mに達する。その外側を今は埋め立てられた堀が廻っていたのだろう。69地点の発掘調査で検出した遺構は幅・深さとも1mに満たず、寺内を区画する溝の一部と考えられる。

次にB型式、集落を囲うものについて。この型式には、久我東町遺跡の調査例（59地点）⁽³⁶⁾・上賀茂神社社家町の調査例（80地点）⁽³⁷⁾・大原野神社社家町の調査例（99地点）⁽³⁸⁾をあげることができる。久我東町遺跡（59地点）では4次にわたって、広い面積を発掘調査することができた（図2）。堀の南東側では掘立柱建物が密集して建ち並び、墓地も検出したのに対して、堀の北側・西側ではほとんど遺構を検出していない。したがって調査地は集落の北西部分にあたり、検出した堀は集落を囲む環濠の一部と考えてよい。堀は3時期の変遷をたどることができる。最初は14世紀初めに集落が形成される時期で、堀は集落の北西部を東西約57m、南北約46mに区切るだけで途中でとぎれてしまう。幅も約1.6mにすぎない。南北方向の部分で約15度西に傾く。ところが、次の時期になると堀は東・南方向にそれぞれ延長され、調査区外へ伸びてゆく。検出した長さは東西で約90m、南北で約125mに及ぶ。堀の方向は最初の時期と同様、やや西に振れる。また、東西方向の部分では中ほどがかなり北にふくらむ形をとる。幅も約5mに拡幅される。最後の時期になると堀は東西方向のみのものとなり、幅も約1.7mに狭まってしまう。この堀が埋没する16世紀頃には集落自体も廃絶する。

上賀茂神社の社家町（80地点）では、東西方向の堀とその北側にL字形の堀を検出している。室町時代後半に埋没するが、出土遺物から後者のほうが前者に先立って掘削されたと推定されている。東西方向の堀は、幅約4.5m、深さ約1.3mで断面形は逆台形の大規模な堀である。調査区東端には、地山を削り残して北側からの突出部が形成されていた。確実な痕跡は確認できなかったが、ここに門と橋が造られていた可能性がある。L字形の堀は、南北部分で広く、幅約3m、東西部分でも幅約1mある。深さは約1mである。堀の北東側には井戸・集石土壙・小石室などの遺構があった。以上のことから、L字形の堀は屋敷を方形に囲う堀の南西部分にあたり、東西方向の堀は屋敷地の南側に社家町全体を囲うために構築された堀と考えたい。上賀茂神社の社家町では現在も、明神川が流れているが、そこからの分流が庭の池に注がれたりして社家町全体の水路網の幹線となっている⁽³⁹⁾。室町時代には明神川の水も調査で検出した堀とつながっていたのかもしれない。

大原野神社の社家町推定地（99地点）でも、3回の調査にわたって室町時代の堀を検出している。未調査部分も含めて復元すると、東西約50m、南北約80mの不整形な方形になる。内側には多数の井戸や、柱穴を検出した。おそらく何棟もの建物があつた痕跡であろう。堀の内側がひと

つの屋敷地であったのか複数の屋敷が集まっていたのかは判断できない。もちろん大原野神社の社家町がこの程度の面積の中に納まるとは考えることはできず、この堀は、上賀茂神社の社家町の調査例の内側の堀と同様、大原野神社の社家町の内部をさらに区切る性格のものと判断できる。同時期の遺構が堀の外側にも広がることもこの推測を裏付けよう。

C型式に属する溝・堀の多くは、右京域を中心とする旧平安京域に集中している。左京域でも堀川通り以西のものもこの型式に含めている。この地域は、平安時代なかば以降、市街地の中心

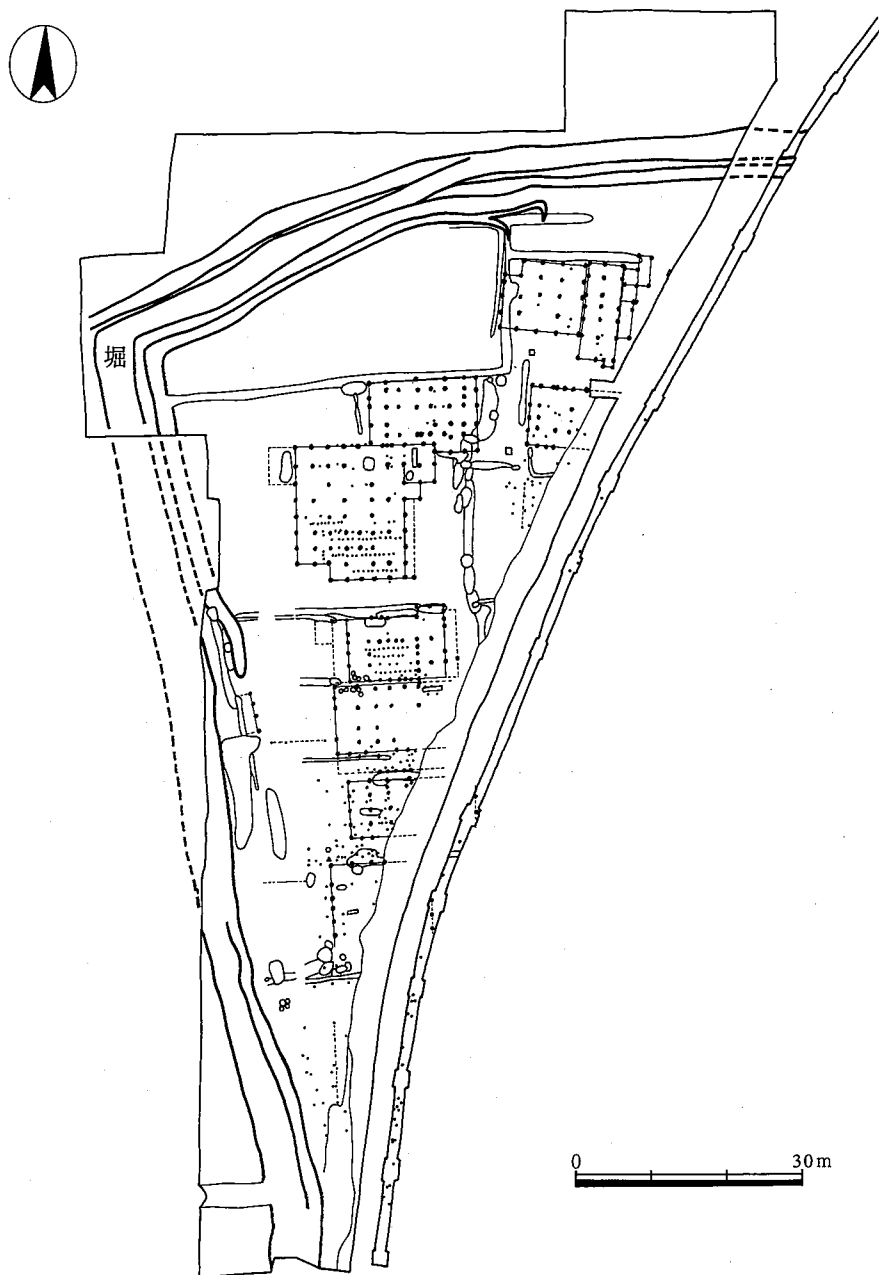


図2 久我東町遺跡の堀 (59地点)

中世京都の堀について

が東へ移動していくにつれて徐々に空閑地に変わってゆき、近代になり、再度、京都市の市街地に含まれるまでは、村落が散在するような景観であったと推定されている。もっとも、市街地の移動はあくまでも一般論的傾向しか分からないのであり、平安時代後期や中世の京都の町はずれの様子は、今回のような検討から逆に実態を捕らえていく必要がある。

さて、C型式には、条坊の側溝を踏襲しているものが多い。規模は幅1mに満たないものから約5mまでのものがある。大宮通りや千本通り（朱雀大路）沿いの例は室町時代前半までに属するものが多く、あるいは、平安京以来の市街地がこの頃まで残り、平安京の頃と同様に道路の側溝として機能していたのかもしれない。一部には流水の痕跡を残すものがあり、条坊の側溝が農業用水路に利用されたものもあったと考えたい。大宮通り沿いに流れていた大宮川が、戦前までは農業用水として利用されたことを以前明らかにしたことがある⁽⁴⁰⁾。

一方、旧平安京域に分布していても、条坊制の方向に一致していながら、道路の側溝にのらない例⁽⁴¹⁾（36地点・78地点⁽⁴²⁾）がある。この周辺は中世村落の一つである中堂寺村があったところであり、これらの堀はB類型に含めることができることができよう。

以上、洛外の堀を3型式に分類して検討を加えてきた。洛外の堀の特徴をまとめると次のようになる。

- ①鎌倉時代後半から室町時代前半（南北朝時代）に出現し、遅くとも戦国時代にはほとんどが埋没してしまう。
- ②旧平安京外の堀は、必ずしも東西方向・南北方向にはのらない。これは地形や条里制地割の影響を受けたとも考えられる。
- ③旧平安京域の溝・堀は、水路を中心として多様な用途が推測できるが、条坊制の方位を踏襲する点は共通する。
- ④居館・寺院を囲む堀と集落を囲む堀は、ともに防御的な性格が強い。一部には水路としての機能を兼ね備えたものもある。
- ⑤居館・寺院を囲む堀は方形を基本の形とし、中には内部をさらに区画するものがある。また、堀に石垣をとまなうものもある。
- ⑥集落を囲う堀はすべて素掘りで、やや不整形のものがある。
- ⑦居館・寺院を囲む堀と集落を囲む堀は複合していることがしばしばある。両者は必ずしも同時に構築されていない。集落を囲う堀の中に居館を囲う堀があるが、その場合は集落を囲う堀のほうが規模は大きい。

4. 洛中の堀

洛中の堀は、全域にわたって、室町時代後半に急増する。これはちょうど応仁の乱が勃発した時期に一致し、非常に興味深い現象である。これをうけて、高橋康夫氏による応仁の乱後の上京・下京の町割り復原図に、調査で発見した堀の位置を書き込んだものが図3と図4である⁽⁴³⁾。上京域・下京域とも堀の多くは15世紀から16世紀にかけて掘削され、桃山時代には埋まってしまう。

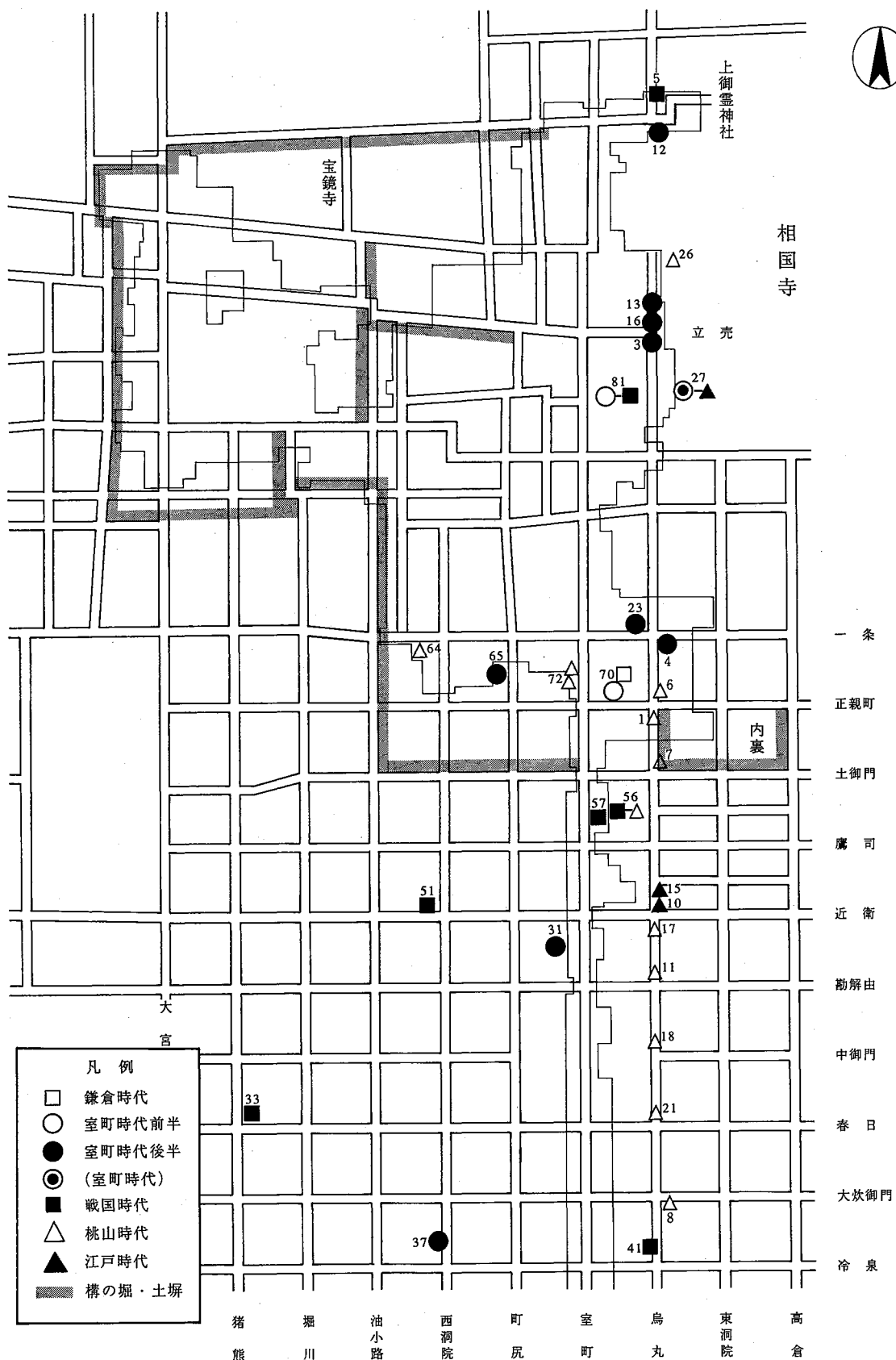


図3 上京の中心部と堀の分布

中世京都の堀について

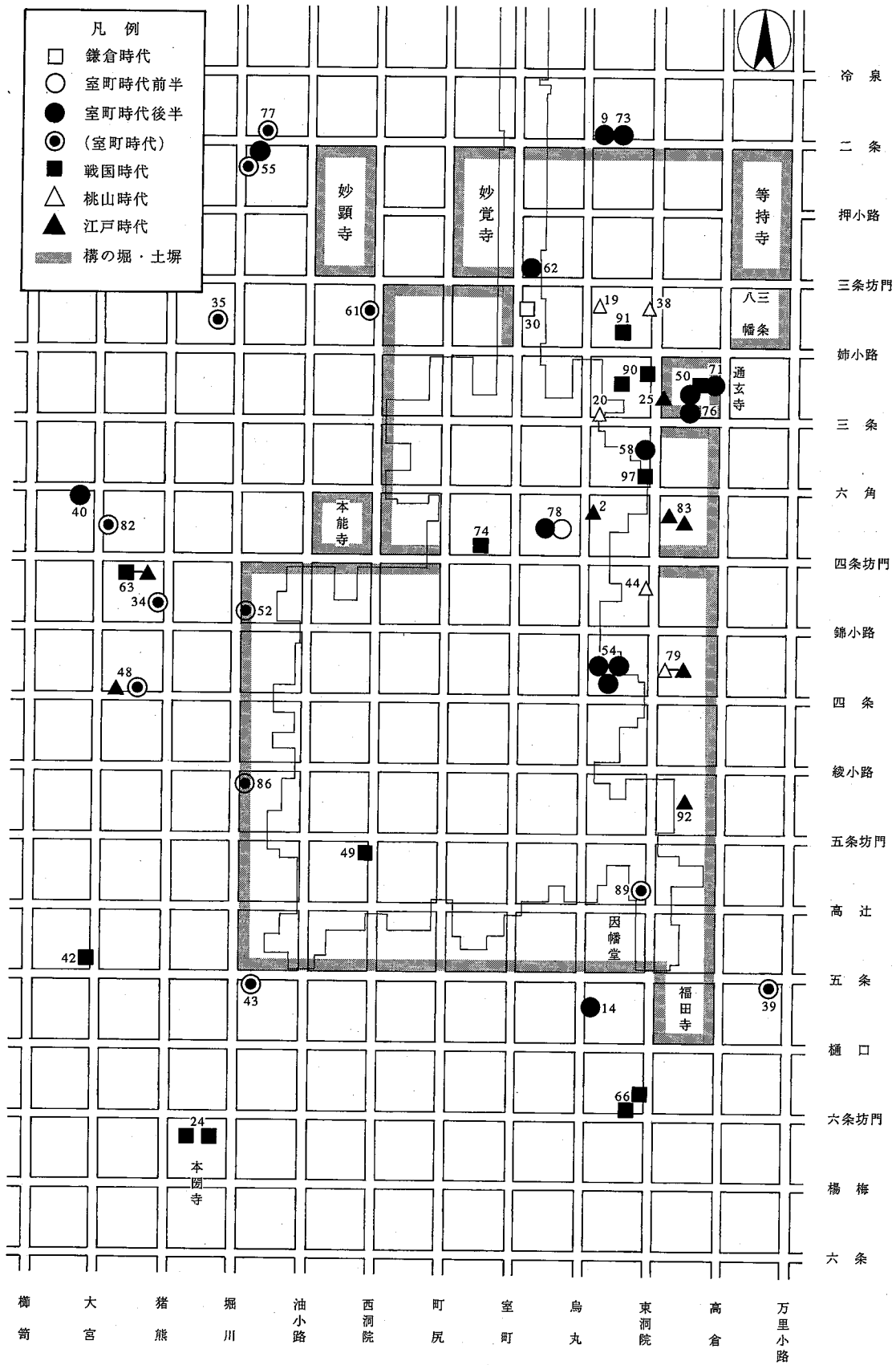


図4 下京の中心部と堀の分布

この傾向は上京域に特に顕著に見受ける。一方、下京域では上京域に比較してよりおそく江戸時代まで残るものもあり、出現の時期は同じくしながらも、その終末には何らかの別の要因が働いたことを予想させる。

分布状況を見ると、洛外と比較して、上京と下京の中心地と推定されている地域に非常に高い密度でドットが集中していることがわかる。もっとも、こうした市街地の中心地の外側にもいくつかの堀が発見されていることにも注目したい。このことは当時の市街地の広がりに関連する問題であり、堀の分布は同時代のほかの遺構の分布状況と合わせて考察する必要があるだろう。そうした作業を行なうことによって、遺跡の中での堀の位置付けも、より明確になっていくことであろう。ただし、今回は十分な分類・位置付けができないものについては詳しく触れないことにする。

上京域の分布状況をさらに細かく見てみると、南北方向では烏丸通りと室町通り、東西方向では一条通りと中立売通り（正親町小路）に沿って、多数の堀が分布しているように見える。ただし、烏丸通りに集中するのは地下鉄烏丸線の建設にともなう調査で多数の堀を検出しているからで、いささかほかとは状況を異にする。また、烏丸通り以東は、京都御所（京都御苑）なので発掘の手が及んでおらず、一条通り以北についても状況は同じで、平安京外は遺跡地図では遺跡として認定されていないため一部を除いて調査ができていない⁽⁴⁴⁾。下京域でも、南北方向では烏丸通りと東洞院通り沿いにドットが集中するが、これもこの付近で実施した調査が多いためである。したがって、発掘した堀の分布状況は上京域・下京域の東側に集中しているが、この分布の片寄り、必ずしも当時の分布密度をそのまま反映していると断定することはできない。

さて、洛中の堀も、洛外の堀の分類と同様、次の3つの型式に分類することができる。

- A：居館・寺院を囲むもの
- B：町組全体を囲うもの
- C：主に水路としての機能を担うもの

洛中の堀は、説明の都合で先にC型式の具体例から検討することとする。上京域・下京域共に、洛外の堀C型式と同様、条坊制の方位を踏襲し、道路の端をはしる溝がある。多くは幅1m前後で、深さは1mに満たない溝といってよい規模でしかない。素掘りの溝がほとんどだが、中には護岸の施設をもった例がある。烏丸通り東側溝に推定できる7地点の例では、幅約1.2m、深さ約0.7mの断面U字形の溝の東西両方の肩に石を2～3段積んであった⁽⁴⁵⁾。また、三条通り北側溝に推定できる20地点の例では、幅わずか0.2m、深さ0.8mの断面U字形の溝の南北両側に薄い板を立ててあった⁽⁴⁶⁾。これらの溝は、若干、前後にズレることはあっても、ほぼ同じ場所に何度も作り替えられることも大きな特徴で、平安京以来、道路の側溝として維持されてきたものと考えて間違いない。

ところが、同じ様に条坊の側溝にあたる部分で発見した溝・堀の中には非常に規模が大きなものがある。今のところは下京域にのみ発見され、上京域では確認できていない。まず、堀川通り沿いでは、二条通りを下がった55地点で幅7mを越える流路⁽⁴⁷⁾、綾小路を下がった86地点でも、立

会調査のため規模ははっきりしないものの、同様の流路を検出している⁽⁴⁸⁾。さらに錦小路を上がった52地点でも流路を整地した後に室町時代の幅約2mの水路が造られていた⁽⁴⁹⁾。これらの流路は、場所からいって、間違いなく堀川の跡であろう。幅7mを越す水量はそれ以外には考えられない。室町時代でも堀川はかなりの水量をもった川として流れていたのである。

西洞院通りは、今も明瞭な谷地形を残しており、ここに川が流れていたことを明瞭に示している。調査では2か所で通りの西側に流路の痕跡を確認している。姉小路を上がった61地点では幅6.5m以上の流路⁽⁵⁰⁾、仏光寺通り（五条坊門小路）を下がった49地点では幅5.2m以上の流路を検出しており、この川もかなりの水量の流れがあったことが分かる。埋土からは15～16世紀の遺物が出土した⁽⁵¹⁾。また、49地点の調査では川の西肩が、平安京の条坊の西洞院大路の道幅よりも西に出てしまう。中世の京都の町並みが、平安京を原形としながら、変動していった証拠の一つである。

東洞院通り沿いの西側でも大規模な水路を7か所で検出している。ただし、現在の東洞院通りと重なっているためほとんどの地点で水路の幅一杯は調査できていない。北から順に見ると、姉小路通りを上がった37地点では幅約2m⁽⁵²⁾、三条通りを上がった90地点では幅2m以上⁽⁵³⁾、六角通りを上がった58地点では、調査区の端で幅は不明⁽⁵⁴⁾、六角通りとの交差点北西の97地点では幅5m以上⁽⁵⁵⁾、錦小路通りを上がった44地点⁽⁵⁶⁾と高辻通りを上がった89地点⁽⁵⁷⁾では立会調査のため詳細は不明、六条坊門小路（現在の五条通り）との交差点北西の66地点では幅約1.2mとなる⁽⁵⁸⁾。豊かな水量の側溝であったと考えざるをえない。東洞院には川が流れていたとの記録もあり、これだけの流量ならば川といってもさしつかえない。問題は66地点で幅が狭くなることである。そこで、五条通り（現在の松原通り）の南側溝を見てみることにする。万里小路を西に入った39地点では、南側溝は幅0.85mであった⁽⁵⁹⁾。そのまま西に目を転じると、堀川通りの手前の43地点では幅が5.4mを越えている⁽⁶⁰⁾。想像をたくましくすれば、東洞院通り西側溝は、幅を広げながら南流し、五条通りで主流は西に屈曲し、分流がそのまま南流。屈曲した主流は西流し、西洞院川もしくは堀川に注ぐ状況を考えることも可能である。

ここに見たように豊かな水量を保った堀川・西洞院川・東洞院通り西側溝（東洞院川）は下京域の導排水の幹線としての機能を担っていたのではないだろうか。さらに、室町通りの東側、姉小路通りを上がった30地点では幅約4mの南北方向の堀を検出している⁽⁶¹⁾。実は『洛中洛外図屏風』には室町通りに川が描かれており、室町通り沿いにも同様の水路があったと推定できる⁽⁶²⁾。さらにこれらに、洛外の堀のC型式で取り上げた、大宮通り西側の水路（大宮川）を考えあわせると、下京域及びその西側には、東から東洞院・室町・西洞院・堀川・大宮とちょうど二町ごとに、南北方向の導排水の幹線としての水路が通っていたことになる。一つの都市機能の整備として評価することができよう。

次にA型式について。この型式は洛外の堀に準じて、b：居館・寺院を囲むものとc：一町の中を区画するものに細分することができる。それぞれがC型式の水路とは無関係ではなかったであろうが、Ab型式のほうがAc型式よりも独立した区画性が高い傾向にある。

Ab型式で居館を囲む堀には、室町殿（花の御所）の調査例（81地点）がある⁽⁶³⁾。現在の烏丸通

と今出川通の交差点の北西側で東西方向の大規模な堀を発見した。堀の北側には大きな石を据えた庭園も見つかっており、この堀が室町殿の南を画する堀であることは間違いなからう。堀は約12m分を検出した。調査地点は平安京の範囲からはずれるが、東西方向に真直ぐに伸びており、室町時代にはこの付近まで町割が拡がっていたことを証明している。堀は大きく3回にわたって同じ場所で作り替えられていた。堀が掘削されるのは14世紀前半である。室町殿造営の際に掘削されたのであろう。幅は約3.4m、深さは約1.5mである。洛外の堀A b型式でこれに匹敵するのは、山科本願時の堀しかない。断面形も鋭いV字形をしているため、壁面は急角度で立ち上がり、よじ登ることは難しかったことと推測できる。さらに、水がたたえられていたことが埋土から分かるので、防御性の高い堀であったといえよう。すぐれて防御的な性格の高い堀としては洛中最古の例になる。このあと堀は15世紀末に作り直される。幅は約2.7mと狭まるが、深さは約1.7mとかえって深くなり、鋭いV字形の断面形も順守され、決して防御的な性格は失っていない。しかし、最後の段階16世紀には、幅約1.4m、深さ約0.7m、断面形逆台形の通有の堀となってしまう、桃山時代には埋まってしまう。この頃にはもちろん、室町殿も廃絶してしまっている。

A b型式で寺院を囲む堀では、相国寺の調査例(27地点⁽⁶⁴⁾)と本圀寺の調査例(24地点⁽⁶⁵⁾)がある。相国寺は上京域の北東に位置する。室町時代には臨済宗京都五山としての寺格を誇った幕府と直結した寺院である。調査では相国寺の西側の部分で堀を検出しており、中には西限の溝もある。現在の境内にも土塁や堀の痕跡を観察することができ、塔頭を多くもっているためか、内部に複雑な区画が存在していたことが分かる。相国寺は何回かの火事で消失はしたものの寺域は伝領されたため、堀も後世まで残った。

これに対して、本圀寺は下京域の南西、六条堀川の地にあった。寺内の北側を調査したときに南北方向の2条の堀を発見している。東側の堀は、南北長約36mにわたって検出した。幅約2.5m、深さ約1.5mで断面形はV字形。西側の堀は、北端が途切れていたため、南北長約30mを検出したことになる。幅は約6.0mと広く、深さは約1.5mである。断面形は独特の形でU字形の堀の底部中央がさらに鋭く切れ込む漏斗形をしている。この堀にはまってしまうと、抜け出すことは容易ではなかったであろう。本圀寺は法華宗の有力寺院で天文法華一揆にあたっては、拠点のひとつとなった。ところが、天文5年(1536)反法華一揆勢力が京中に攻め寄せた時には攻撃目標となり、堀も結果としては役に立たず、本圀寺は焼失する⁽⁶⁶⁾。堀の埋土からは、多量の焼土と土器類が出土しており、このことを裏付けている。なお、本圀寺周辺で実施した下水道工事にともなう立会調査で、数多くの区画のための溝を検出しており、本圀寺を中心とした寺内町が建設されていたことを示唆するものである。

洛中の堀A b型式が、市街地の周辺部に分布するのに対して、洛中の堀A c型式は、上京域、下京域とも市街地の中心部に多く検出している。一町の内部を区画したり、道路にそって発見することも多い。規模は大小様々であるが、方向はほとんどが条坊制の方位を踏襲し、東西方向・南北方向にのっている。左京三条三坊十三町(90地点)で検出した堀はちょうど十三町の北東側4分の1を囲うようにL字形に屈曲していた⁽⁶⁷⁾。断面形は逆台形で幅約6m、深さ2mを越える洛

中では大型の堀である。調査では、室町時代の石組の池をもった庭も発見している。この4分の1町の区画は江戸時代はじめの絵図には、洛中の豪商のひとりであった後藤家の屋敷があったことが記されており、この区画が戦国時代や室町時代にまでさかのぼる一つの屋敷地であった可能性は高い。また、十三町の真北に位置する十四町でも、一町の東西を2分する南北方向の堀を検出している⁽⁶⁸⁾。間に姉小路通りが通るので一続きの屋敷地でなかったのは間違いない。しかし、二つの堀がつながっていた可能性は高く、十三町の中央で東に屈曲した堀は、先に説明した洛中の堀C型式の東洞院通り西側溝につながっていたものと考えたい。さらに、十三町の庭園の池には北東側に滝の石組みがあり、位置関係からいって東洞院通西側溝から水を引いていたことが推測できる。このように洛中の堀A c型式には、水路の幹線＝洛中の堀C型式や別個の屋敷を囲う洛中の堀A c型式とつながっていたのである。

左京四条三坊十三町の調査(54地点)では、一町の内部を区切る3条の溝を検出した⁽⁶⁹⁾。それぞれ四条通りから北へ約40m、東洞院通りから西へ51m、烏丸通りから東へ33mと一町の大きさとは無関係の所に通っている。また、左京四条四坊二町の調査(83地点)では、東洞院通りから東へ約24mの所に南北方向の堀を発見した⁽⁷⁰⁾。幅約2.7m、深さ約1.3m、断面形逆台形で、水が流れた痕跡があり、一部は杭で護岸していた。一方、下京の南にあった七条町では、通りに面して建ち並ぶ町屋の裏側に区画の溝があったことが指摘されている⁽⁷¹⁾。あるいは、54地点や83地点の堀は下京域での町屋の裏側を区画する溝であったのかもしれない。なお、83地点では南北方向の堀のさらに東約14mのところL字形の空堀もあった。83地点の東側隣接地で実施した発掘調査では、一定の区画を占める屋敷があったことが判明している⁽⁷²⁾。このように洛中の堀A c型式は必ずしも一町の内部を整然と区画はしないのである。様相は複雑である。

洛中の堀には、これらとは別に町組全体を囲う堀がある。洛中の堀B型式がそれで、確実なものには、上京域では上御霊神社門前の調査例(9地点)⁽⁷³⁾、下京域では左京三条三坊十四町の調査例(38地点)⁽⁷⁴⁾と左京五条四坊二町の調査例(92地点)⁽⁷⁵⁾がある。9地点では幅約5.0m、深さ約1.3m、断面形逆台形の東西方向の堀を検出した。調査地の町名は「内構町」といい、ちょうど、推定されている上京域の北辺の東端近くにあっている。この堀は桃山時代に埋没するが、その後同じ場所に規模を小さくしながらも、何度も溝が作り替えられ、江戸時代まで機能していた。

左京三条三坊十四町(38地点)の堀は、幅約6m、深さ約2mの大規模な堀である。水が流れていた。この堀は条坊の方向にのらず、北西から南東方向に流れ、洛中の堀C類型の東洞院通り西側溝に合流している。これより南側の東洞院通り西側溝の水量に多大な影響を与えたと考えざるをえない。

左京五条四坊二町(92地点)では、約50mの長さで、幅約6.5m、深さ約2.0の堀を検出した(図5)。断面形は逆台形をしている。この堀は調査区北端では、一町の東西のほぼ中心にあるが、調査区中ほどで向きを東寄りに変え、湾曲していく。この堀については、調査の段階で、掘削から埋没にかけての過程を検討できたので、やや詳しく説明することとする。調査区内は左京のほかの調査例と同様に各時代の遺構が相互に複雑に切り合っていた。そのなかでこの堀に切られた

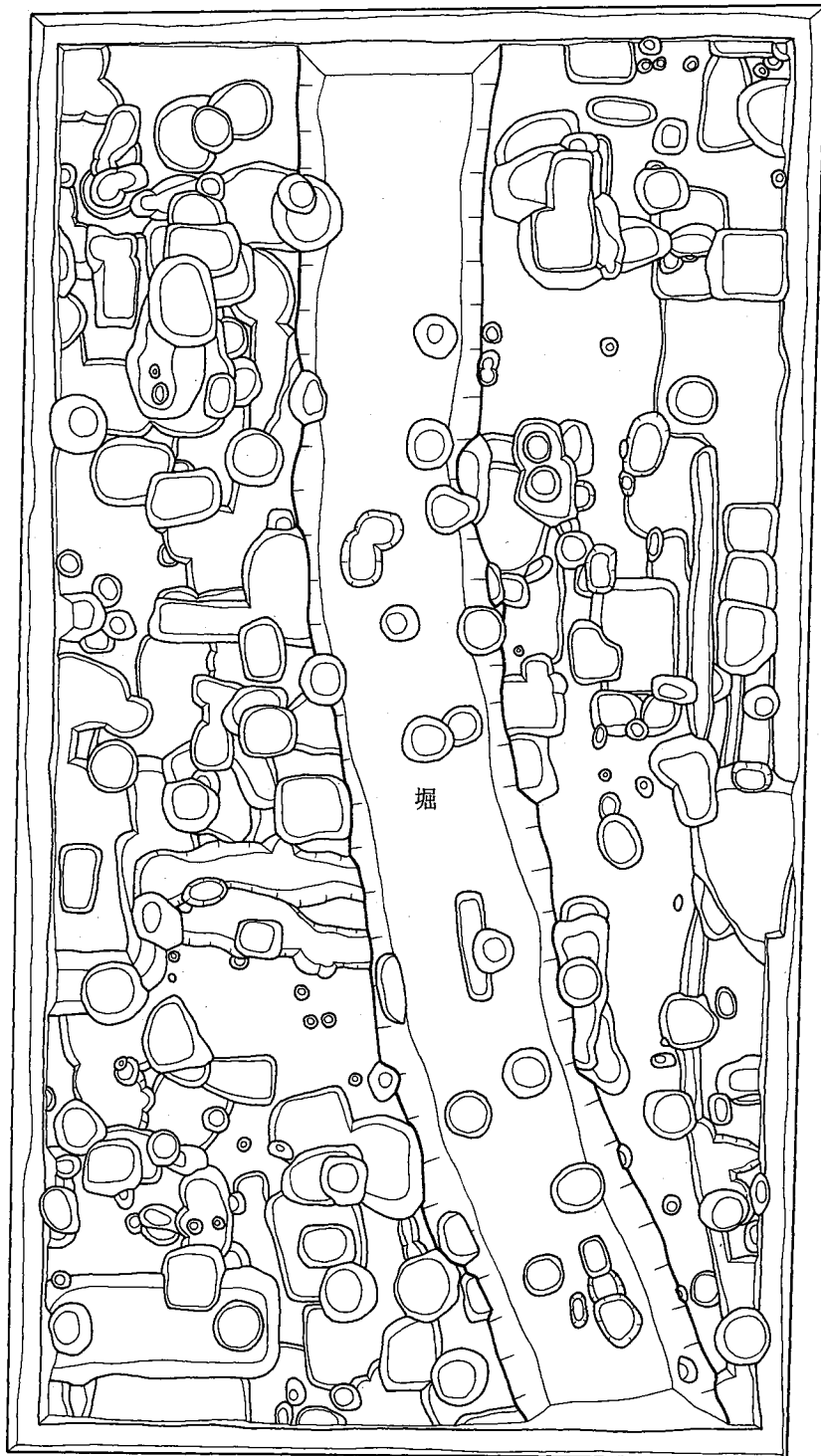


図5 左京五条四坊二町の堀 (92地点)

遺構には鉄滓と土師器片を多量に含んだ土壌があった。土師器の年代は15世紀なので、堀の成立の上限がこれよりさかのぼることはない。一方、堀の埋土の観察では、堀の底が少し埋まりかけた段階で、明瞭な水流の痕跡を示す粘土と微砂の層があり、その中から16世紀末ないし17世紀初頭の瀬戸・美濃産の陶器が出土している。したがってこの頃には堀はまだ機能していたことになるので、掘削の時期は16世紀中に絞り込むことができる。その後、17世紀になって堀の大部分は埋められる。先の粘土と微砂の層の上は西側から一気に土が埋められていた。そして、その埋土のなかには、堀に切られた周辺の土壌に含まれている15世紀の土師器と鉄滓が多量に含まれていた。以上のことからこの堀がたどった経過を復元してみると、まず、16世紀のある時期に堀が掘削された。その際、排土は堀の西側に積み上げられて土塁となった。堀の掘削により破壊された土壌中の遺物も土塁のなかには入ってしまう。堀は16世紀を通して機能し続けたが、17世紀には大部分が埋められてしまう。そのときに西側の土塁が崩され、堀の埋土として利用されたのである。このように考えれば、埋土に15世紀の遺物が含まれていることにも説明がつく。洛中の堀で土塁があったことを直接しめす遺構はまだ見つかったくないが、「構」の施設に土塁があったことは間違いないだろう。土塁ではないが、左京四条三坊十六町の調査例（58地点）では、東洞院通り西側溝の西側に平行する柵の痕跡を検出している⁽⁷⁶⁾。堀に付随して様々な施設があったとみて間違いなであろう。

左京五条四坊二町の堀で流水の痕跡があったことから、洛中の堀B型式は独立していたのではなく、ほかの堀とつながっていたことが分かる。実は、真北に6町の所に位置する左京三条四坊四町の調査（76地点）では、一町の東西の中心に南北方向の幅約3mの堀を検出しており⁽⁷⁷⁾、順当ならば（38地点→）76地点→92地点のつながりを考えることができる。しかしながら、その推定線上にあたる左京四条四坊二町で実施した調査では、一町の東西の中心に南北方向の堀を検出するかわりに同時代の柱穴が多数みつき、町屋の密集地であったことが判明した⁽⁷⁸⁾。洛中の堀B型式はかなり複雑な形をしていたと考えられる⁽⁷⁹⁾。洛中の堀B型式の大きな特徴に条坊制の方向を踏襲しないことがある。洛中の堀A型式やC型式が条坊の方向を踏襲した原因の一つには、それらが構築された地域が町家や屋敷の密集地であったため規制を受けたことが考えられる。これに対して、洛中の堀B類型が蛇行しているのは、町家の密集地を避けてその外側を最短に囲ったと考えることができよう。左京五条四坊二町の例で見ると、堀が機能していた16世紀の遺構はほかの時代に比較して少なく、また、この堀の一町南側の三町では推定されている町組が東側に張り出しており、有力な証拠といえるのではないだろうか。

以上、洛中の堀を3型式に分類して検討を加えてきた。洛中の堀の特徴をまとめると次のようになる。また、下京域の堀・流路の復原案を図6にまとめてみた。

- ①洛中の堀A型式・C型式は、平安京の条坊の方向を踏襲する。これは、町割の規制をうけたためと考えられる。これに対して、洛中の堀B類型は、建物の密集地を避けた外側を囲むため、その規制を受けなかった。
- ②時期は上京域、下京域とも室町時代の後半に急増する。ところが、上京域では多くが桃山時

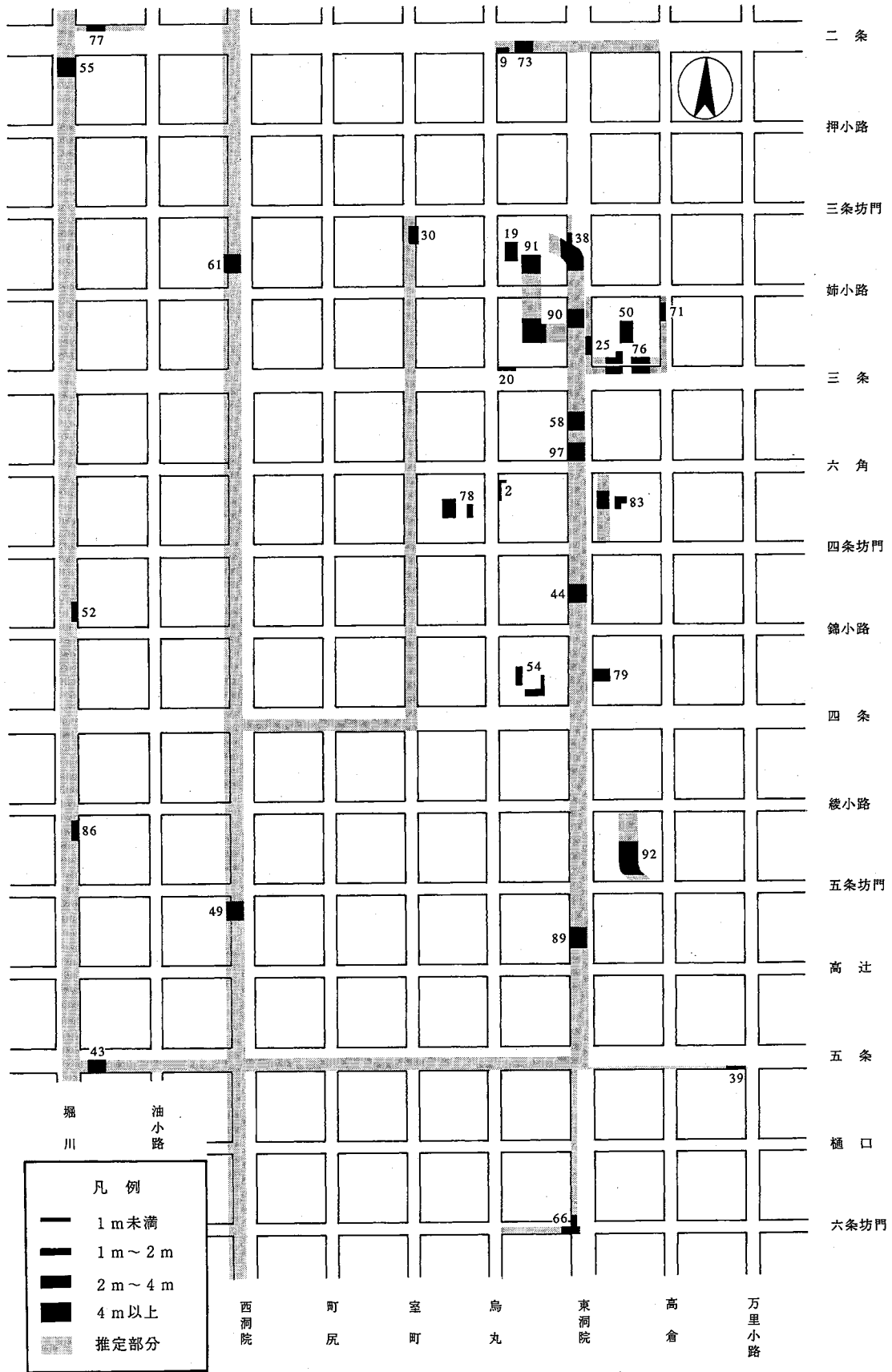


図6 下京の堀・流路復原図

代に埋没するのに対して、下京域では江戸時代にまで残るものが目立つ。

- ③上京域、下京域とも道路の側溝が整備されている。さらに、下京域では2町ごとに南北方向の幹線としての水路が整備されていた可能性がある。
- ④居館・寺院を囲う堀には、内部の独立性の高いA b型式と、そうでないA c型式がある。両者の区別は難しいが、A b型式の方がA c型式よりも規模が大きい傾向にある。防御的な性格は前者のほうが強い。
- ⑤洛中の堀A c型式には、一町の内部を条坊制の規格にそって整然と区画するものと、任意に区画するものがある。また、水堀と空堀の違いもある。囲う対象により、いろいろな堀が採用されたり、併用されたりしたことが分かる。
- ⑥洛中の堀B型式は16世紀に掘削された。規模が大きく、内側には土塁も備えた、防御的な性格の高い堀であったと考えられる。

5. 堀のおわり

第3節、第4節で見てきたように、室町時代から戦国時代にかけて盛行した洛中洛外の堀の多くはやがて次々と埋められ、江戸時代にまで残るものはほとんどなくなってしまふ。京都の町に何が起こったのだろうか(図7)。

織田信長が建造した二条城(以下、旧二条城とする)が、地下鉄烏丸線の建設にともなう埋蔵文化財の調査で発見されたのは、今から約20年も前のことである。調査では、出水通りを上った地点から丸太町通りを上った地点にかけて向かい合う石垣を4組検出した⁽⁸⁰⁾。17地点・11地点・21地点で幅約7~8m、で18地点では幅は、幅約25mもある。深さも上部が削平されているにもかかわらず、最も深いものでは約3.5mを越えていた。断面形は、規模が大きいこともあって、2段に落ちる逆台形を呈する。下段は素掘り、上段には石垣が積んであった。ルイス・フロイスの記録どおり、この石垣に多数の石仏が転用されていたことは有名な話である。堀は17地点・18地点・21地点では、東西方向を向くが、11地点では石垣が南西方向を向いていた。また、17地点では石垣が北に張り出し、門の跡と推定されている。ここには暗渠も作られていた。内部の複雑な構造の一端を示しているといえよう。

幅25m、深さ3.5mを越える巨大な堀、高く積み上げられた石垣、いずれもそれまでの京都には見られなかった施設である⁽⁸¹⁾。室町殿の堀と旧二条城の堀を比較すると、京都を支配下に治めた同じ権力者の構築物としても、規模といい、構造といい、歴然とした違いを看取することができよう。洛中に本格的な城郭が出現したのである。人々はこの城をみて、どのような印象を受けたのであろうか。旧二条城が造営される時期には室町殿の堀は入れ替わるかのように埋まってしまっている。また、この頃には洛外の堀のほとんども埋まってしまっている。

豊臣秀吉は、京都の町にたいして様々な施策を行なった。それが中世京都の堀にも大きな影響を与えたことは想像に難くない。秀吉が建築した聚楽第については、おおよその内城の位置を確定することが可能となった⁽⁸²⁾。それらによると内城は、現在の一条通り・大宮通り・出水通り・浄

福寺通りに囲まれた範囲にあったことになる⁽⁸³⁾。その外側に外郭が巡っていたらしい。内城の東堀推定地で実施した調査では、幅約30m、深さ7mを越える巨大な堀を確認した⁽⁸⁴⁾。あまりにも規模が大きかったため、堀の底は完掘できていない。西側の肩は2段に落ち、東側の深い部分が水堀となっていた。堀の埋土には多量の金箔瓦が含まれていた。聚楽第は天正15年（1587）に竣工し、文禄4年（1595）に破壊されるまでのわずかの期間しか存在しなかったが、その破却にあたって堀に屋根瓦をはじめ一切合財をほうり込んだのであろう。

聚楽第の東側には、土御門内裏との間に、桃山時代に埋没する堀が集まっている。このなかで56地点では、L字形に東西方向から南北方向に折れ曲がる堀を検出した⁽⁸⁵⁾。幅約2.5m、深さ約1.5mの断面形U字形で、一部に石を積みあげて護岸している。64地点でも幅約3.0m～4.5m、深さ約1.6～2.4mのL字形の堀に、北西-南東方向の幅約2.1mの堀と幅約1.4mの堀が取り付いていた⁽⁸⁶⁾。72地点でも幅6mを越える東西方向と南北方向の堀を一条ずつ検出している⁽⁸⁷⁾。堀には多量の金箔瓦が埋められていた。これらの堀は、聚楽第の周辺に建設された大名屋敷を囲う堀であったと考えることができる。

秀吉の造ったもう一つの巨大な堀は、京都の町を大きく囲った「御土居」である（図8）。御土居の大部分は、すでに江戸時代から破壊が進んだため、形を変えてしまったり、痕跡すらとど

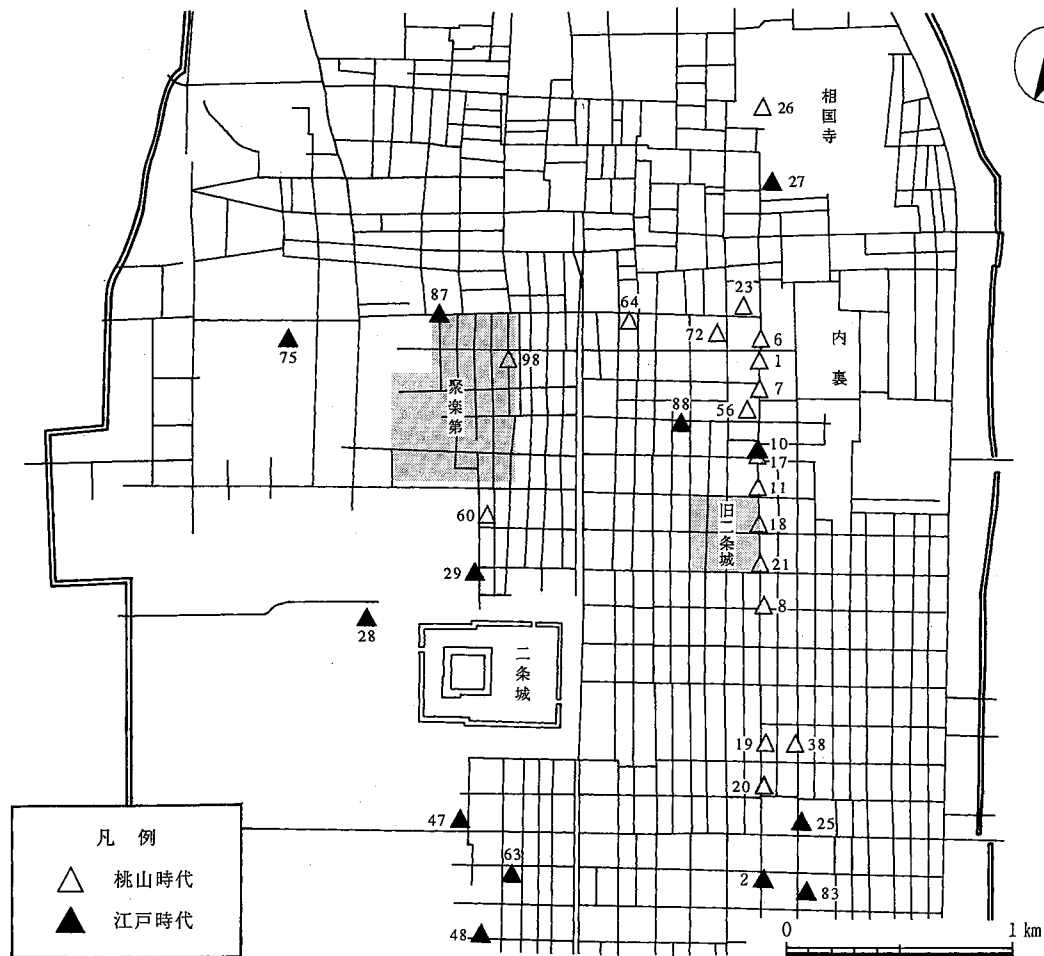


図7 近世の京都と堀

中世京都の堀について

めていないことも多い。現在も地上に姿をとどめている部分は、史跡として整備されている。調査では36地点⁽⁸⁸⁾・53地点⁽⁸⁹⁾・93地点⁽⁹⁰⁾の3か所で御土居を検出している⁽⁹¹⁾。このうち53地点・93地点は、油小路通り東側に南北方向に伸びる一連のものである。いずれの調査地でも、幅は約20mもあった。深さは深いところで約5m、浅いところでも約1.5mあった。あまりにも幅が広いので断面形は平たい逆台形となる。素掘りで水をたたえた痕跡がある。堀を掘削したときに出た土は内側に積み上げられ、36地点の調査では、それが幅約15m、高さ約2mの土塁となって残っていた。ところが、この広大な堀は江戸時代の初めには多量の廃棄物が投棄され、埋まっていってしまう。

秀吉が行なった施策には、ほかにも寺町の編成や天正地割りの施行がある。上京域・下京域やその周辺部に散在していた浄土宗・法華宗・時宗を中心とする寺々が、寺町通りや寺之内通りに移転させられた跡地は、整地され、あらためて町屋用地として整備された⁽⁹²⁾。その際には寺院を囲っていた堀（洛中の堀A b型式）は、埋め立てられてしまったはずである。同時に天正地割りに代表される町並の再編によって、洛中の堀A c型式やB型式が埋め立てられたことも十分にあり得ることである。左京域の調査では、16世紀末から17世紀前半にかけての広範な拡がりをもった整地層を検出することがしばしばある。この整地層が、天正地割りの施行に対応しているのかどうかは、まだ確定できていない。しかし、この時期に、左京域に大規模な土地の改変が行なわれ

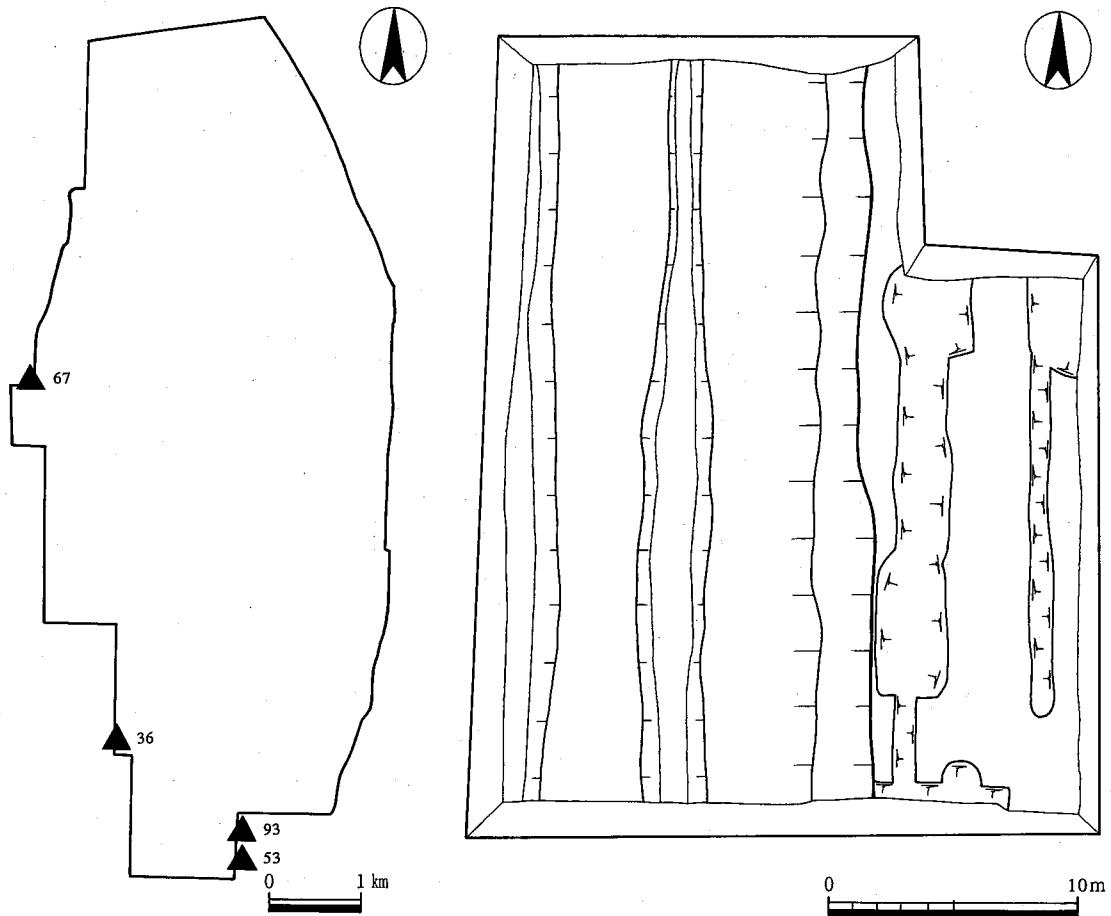


図8 御土居の堀（右図は93地点）

たことには変りない。洛中の堀もこうして桃山時代以降次々と埋没していくのである。

秀吉のあと、京都の町は、徳川氏によっても施策が加えられ、17世紀には『洛中絵図』に記録されたような景観に取まって行く⁽⁹³⁾。この頃の京都には、堀と呼んでもよい防御を目的とした施設は、二条城は当然のこととしても、ほかには本圀寺や本願寺といった一部の寺院などにしか残らない。ほとんどの堀は完全に埋められたり、道路の側溝や区画の溝に姿を変えてしまうのである。御土居の堀も埋まってしまう。これ以後、京都の町が防御を目的とした堀で武装することは二度となくなったのである。

6. まとめ

最後に今までみてきた中世京都の堀の特徴をまとめ、その歴史的な意義について若干の考察を加えることとする。

まず、堀そのものの特徴から検討する。京都の堀の分布密度は調査密度の片寄りの影響を差し引いても、洛中に高く洛外に低い傾向にある。人口の集中している部分に多くの堀が必要とされたことが分かる。洛中では原則として堀は平安京の条坊の方位を踏襲し、東西方向もしくは南北方向にのび、水路網を形成していた。この影響は一町の内部にまで及んでいる。洛中よりも人口密度が希薄だったと考えられる、洛外の旧平安京右京域でも同様である。平安京の条坊制の名残りが根強くとどめられたといえよう。但し、洛中の堀が条坊制の方位を踏襲したことは、あくまでも人口の密集地での効率を求めたからにすぎない。なぜならば、洛中の住民は大きく蛇行する洛中の堀B型式も同時に構築しているからである。彼らにとって、制度としての条坊制は決して強制力をもたなかったのである。一方、旧平安京外の地域では、地形や条里制の制約のある程度は受けたと推測できるが、洛中の堀に比べると任意の方向を取り、形もやや不整形なものが多い。

堀の断面形の形状は、V字形・U字形・逆台形が基本である。幅が広くなると、逆台形のものが多くなる。幅の広い堀でV字形の断面を保持しようとする、相当な深さまで掘り下げることが必要となるので、逆台形の断面形を採用したのは当然のことといえよう。そうした傾向のなかで、断面形を漏斗形に掘り下げた本圀寺の堀は、規模と深さの両方を備えた非常に防御性の高い堀と評価できる。旧二条城や聚楽第の堀の断面の形状は、共に内側が犬走りを用意して二段に落ち、外側が一段で一気に落ちる、逆台形が二つ重なったような形をしている。深くなる外側の部分には水をたたえていた。洛外の堀A b型式では一部に石を積みあげて護岸施設を作ることがあったが、旧二条城や聚楽第の堀はさらに高い石垣を積んでいる。旧二条城や聚楽第では、幅広い堀を造りながら、石垣を積みあげることによって相対的な深さをも獲得したのである。

堀の類型と堀の規模との関係には、次の点を指摘することができる。洛外の堀では、上賀茂神社社家町の調査例に顕著のように、集落全体を囲う堀B型式のほうが居館や寺院を囲う堀A b型式よりも規模が大きい傾向にある。この傾向は洛中の堀B型式とA型式の関係にも当てはまる。洛中の堀では、独立性が相対的に高いA b型式の堀のほうが町組のなかに組み込まれているA c型式の堀よりも規模が大きい傾向にある。そして、旧二条城・聚楽第・御土居の堀は、いずれを

中世京都の堀について

取っても洛中洛外に存在した如何なる中世の堀よりも圧倒的に規模が大きい。

では、具体的にいくつかの堀について、断面形をもとに1mの長さ分の掘削にあたってのおおよその排土量を推定し、比較してみよう(図9)。中世によくみられたA型式の堀の典型的な例として、幅1.2m、深さ1.0m、両肩の立ち上がり70°の堀を想定すると、長さ1mあたりの排土量は、ほぼ1m³になる。規模の大きいAb型式の堀として、室町殿の創建時の堀では約3m³になる。断面形がV字形なので幅のわりには排土量が少ない。堀B型式の例として、洛外、上賀茂神社社家町の東西方向の堀では約4m³、洛中、左京五条四坊二町の堀では約12m³となる。ここまでの比較では、洛中の堀B型式の大きさが際立っている。ところが、御土居になると、幅20mで最も深いところでは5mあるので、1mあたりの排土量は約90m³、深さ3mとしても50m³を越えてしまう。さらに、京都市域で見つかった最も大きい堀である聚楽第東側内堀では、およそ180m³になる。これは、室町殿の約60倍の量で、中世京都で最も大きかった左京五条四坊二町の堀と比べても約15倍になる。確かに、洛中の堀B類型はかなり広い範囲を囲ったと考えられるので、全体の土木量は聚楽第を上回ったかもしれない。しかし、同様に市街地を囲った御土居と比較すると、1mあたりの排土量は御土居が洛中の堀B型式の約5倍あり、加えて、総延長も御土居のほうが数倍も長かったことは明らかである。中世の堀と秀吉が造った堀との土木量の差は、まさしく桁違いであったといえよう。

時期的な消長にはこれまでも触れてきたが、ここで、再度まとめてみる。堀が出現するのは洛外のほうが早く、洛中のほうが遅い。洛外の堀は早い例は13世紀の後半には出現している。一方、洛中で最初に出現するのは室町殿の堀で、おそらく14世紀前半の創建時に掘削されたのであろう。この時期の洛中には、堀があったとしても水路としての機能を主に果たしたC型式のみであったと考えている。

洛中に防御的な性格を備えた堀が、数多く構築され始めるのは15世紀になってからである。このことは、再三にわたって洛中を襲撃した土一揆とも深い関係があるだろうし、もちろん応仁の乱との関係を切り離すこともできない。ちょうどこの頃、久我東町遺跡の堀にみたように、洛外

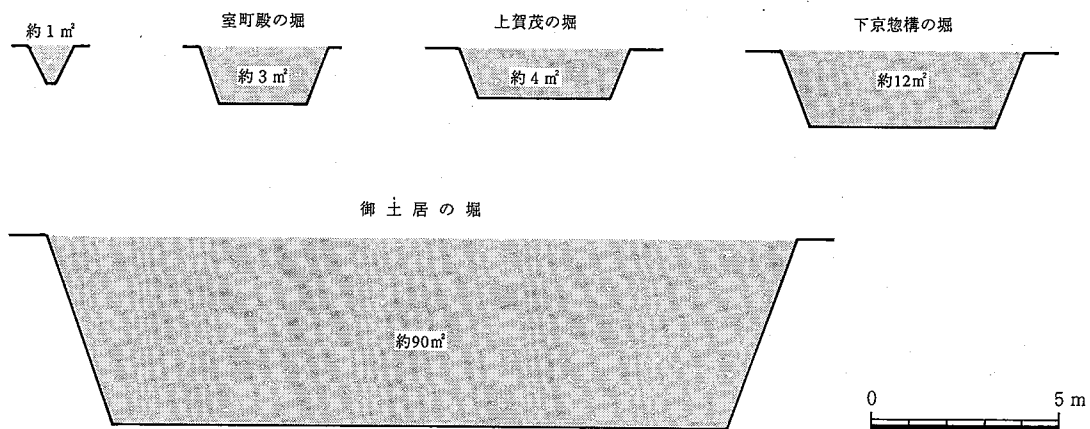


図9 堀の規模の比較

の各地でも堀が整備されたことが推測できるからである。応仁の乱を契機として洛中洛外の諸集団は防御のための堀を構築して、武装するようになった。細かくみると、洛中の堀はA型式のみで、B型式の堀はまだ出現していない。導排水の幹線であったC型式の堀を基幹にして水路網が広げられていった。もちろん、空堀も併用している。また、洛外の堀は、集落の成員の階層関係により、A型式とB型式が組み合わさっていろいろな形が取られた。

16世紀になると、まず、洛外の堀が埋まってしまう。この現象は15世紀後半にまでさかのぼれることができるかもしれない。しかし、要因は、いまのところ定かではない。逆に洛中ではこの時期に、それまでになかった巨大な堀が市街地の周りに巡らされる。堀B型式である。文献資料に出てくる、「惣構」がこれにあたるのは間違いなからう。この堀は内側に土塁を積みあげた非常に堅固に防御性が高い施設であった。上京域・下京域の全体を囲う形態や必要とされた土木量の大きさからみて、これだけ巨大な堀は、よほどの決意がないと構築されるはずはない。⁽⁹⁴⁾

ところが、16世紀の後半から終りにかけて、洛中の堀が次々に埋まっていく。上京域で早く、下京域で遅い傾向にあるのは、上京域では聚楽第の造営による影響がより強く与えられたものと考えたい。下京域でほとんどの堀が埋まってしまうのにもそんなに時間はかからなかった。

堀は防御・導水・排水・区画などさまざまな機能を兼ね備えていた。防御的な性格から見ればA型式やB型式がより大きな役割を果たしたことであろう。A型式はA a型式・A b型式・A c型式の順で独立性は低くなり、防御的性格の純粹さは失われていく。室町時代から戦国時代にかけて日本各地では、居館の堀が大型化し、独立性を高め、居館の住人を集落から隔絶するようになる。逆に京都では、全体を囲う洛中の堀B型式が出現した。もちろん、上京域・下京域の中には武家・公家・社寺・商工業者などさまざまな職業・階層の人々が生活していた。しかし、違いを含み込みながらも、すべてを囲う堀が築かれたことを評価したい。そうした京都の町に、突然、当時としてはもっとも発達した城郭である旧二条城が出現し、堀B型式と対峙した。結果は堀B型式の埋没に終わる。聚楽第と御土居は隔絶をより確かなものとした。形態だけをいえば御土居と洛中の堀B型式は同じ型式に含めなければならない。しかし、御土居は豊臣秀吉の聚楽第という居館の堀の指向性が量的に拡大したものにすぎない。聚楽第は二重の堀によって家臣団および京都の住民と隔絶し、御土居によってほかの国々と隔絶したのである。B型式の堀が、住民の手によって整備・維持されたのに対して、御土居が無用の長物として、完成とほとんど時を経ずして、土塁は崩され、堀はゴミで埋められたことはこれを象徴している。

日本では、防御を目的とした堀が次々と掘られた時代が、過去に2回あった。弥生時代と戦国時代である。中世の京都に築かれたさまざまな堀は、外に対しては威圧と防御、内に対しては生活と結集の象徴であったのである。

本稿の成稿にあたっては、(財)京都市埋蔵文化財研究所職員の諸氏をはじめ、以下の方々に多くの御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

伊野近富・高橋昌明・千葉 豊・中井 均・仁木 宏・橋本久和・福永伸哉・北条芳隆・森島康男・山田邦和

註

- (1) 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物 同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ』 同志社大学校地学術調査委員会 1978年。
「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-3』 京都府教育委員会 1980年。
『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 白河北殿北辺の調査』 京都大学埋蔵文化財センター 1981年。
『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年。
『平安京左京四条三坊十三町 長刀鉾町遺跡 平安京跡研究調査報告第12輯』（財）古代学協会 1984年。
小森俊寛「消費地の様相＜平安京＞講義資料」『奈良国立文化財研究所 中近世窯業調査課程資料』1990年。
などが、平安時代から江戸時代までを概観している。
- (2) 『京都の歴史 1～4』 学芸書林 1968年～1971年など多数ある。
- (3) 木下政雄「京都における町組の地域的發展 —上京立売組を中心として—」『日本史研究』92 1967年。
- (4) 高橋康夫『京都中世都市史研究』 思文閣出版 1983年。
高橋康夫『洛中洛外 環境文化の中世史』 平凡社 1988年。
- (5) 黒田紘一郎「都市図の機能と風景」『絵図にみる荘園の世界』 東京大学出版会 1987年。
今谷 明『京都・一五四七年 描かれた中世都市』 平凡社 1988年。
高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ 空間』 東京大学出版会 1989年。
- (6) 「構」とは、堀・土塁・塀・柵・釘貫・木戸など防衛を主な目的とした施設の集合体である。
- (7) 玉村登志夫「中世の京都 —室町時代の京都—」『講座考古地理学3 歴史的都市』 学生社 1985年。
- (8) 足利健亮『中近世都市の歴史地理』 地人書房 1984年
足利健亮「聚楽第内城について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 中山修一先生喜寿記念事業会編 三星出版 1992年。
- (9) 森島康男「3. 平安京跡（聚楽第跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年。
- (10) 1994年9月18日の「第2回 平安京・京都研究集会」では聚楽第がテーマとして取り上げられ、仁木宏・中井 均・森島康男・百瀬正恒各氏により研究成果が発表された。
- (11) 永田信一『朝倉一乗谷シンポジウム資料』。
- (12) 堀内明博「戦国期の京都」『清須 —織豊期の城と都市— 研究報告編』 東海埋蔵文化財研究会 1989年。
- (13) ここでは鎌倉時代以降の京都の市街地とその周辺部をそれぞれ「洛中」・「洛外」と呼び分けることとする。洛中のおおよその範囲は、図1に示した上立売通り・鴨川・五条通り・大宮通りに囲まれた地域にあたる。ただし、時代により便宜的に用いることもあるので注意していただきたい。今回は果たせなかったが、各時代の市街地の範囲については、調査で見つかる遺構の性格や、遺構・遺物の分布密度などから確定することを目指したい。
- (14) 横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』 法政出版 1988年。
- (15) 平安京には、東京極川・東洞院川・西洞院川・堀川・大宮川・耳敏川・西大宮川・西堀川（紙屋川）・西洞院川（佐比川）・西室町川などが南北の通りに沿って流れていたといわれる。

- 村井康彦「Ⅲ 平安京の造営1 新京の造営」学芸書林 1970年。
- (16) 神吉和夫・神田徹・増味康彰・中山卓「古代都市の雨水排除計画 -平安京を事例に-」『水工学論文集』37 1993年。
ただし、神吉氏らの復元した水路網は東西方向の排水に重点がおかれているが、後述するように筆者は南北方向の水路がより優位であったと考えている。
- (17) 現在、(財)京都市埋蔵文化財研究所では、一丈=2.984708m、基準方位は北が西に0度14分3秒傾く、という数値を得ている。
- (18) 秋山國三「第二章 条坊制の『町』の変容過程-平安京から京都へ-」『京都「町」の研究』法政大学出版局 1975年。
- (19) 「特集 中世居館」『季刊 自然と文化』30 観光資源保護財団 1990年。
- (20) 「六波羅政庁跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (21) 1992年、平氏西八条第の推定地にあたる梅小路操車場跡地で実施された試掘調査で12世紀の遺構・遺物が出土している。堀は発見できていない。
- (22) 京都市域の埋蔵文化財調査は、平安京域に集中しており、平安京外の調査は概して少ない。したがって、洛外の堀は、現在判明している以上に密に分布していたと考えたい。
- (23) 山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号 京都大学人文科学研究所 1986年。
- (24) 「一乗寺松田町遺跡隣接地」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- (25) 「鳥羽離宮第88次調査」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年ほか。
吉崎 伸「鎌倉・室町時代の京都」『第43回 京都市考古資料館文化財講座資料』1990年。
- (26) 六勝寺研究会「城之内遺跡現地説明会資料」1976年。
- (27) 註(23)に同じ。
- (28) 「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
- (29) 木下 良「西岡地方における城館と防御集落」『京都社会史研究』同志社大学人文科学研究所編 法律文化社 1971年。
- (30) 「史跡大覚寺御所跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (31) 「史跡名勝嵐山」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (32) 「松ヶ崎廃寺」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (33) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年。
- (34) 室町時代の石垣は慈照寺(銀閣寺)でも検出している。立地や境内の中の位置から考えて、防御的な機能を担っていたとはいえず、むしろ、山側からの水の流路であったようだ。
百瀬正恒「東山殿(慈照寺)の建物配置と庭園」『日本史研究』399 1995年。
- (35) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 第一法規出版社 1985年。
- (36) 「久我東町遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年。

中世京都の堀について

- (37) 『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
- (38) 「南春日町遺跡第20・21次調査」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
「南春日町遺跡第22～24次調査」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (39) 京都市都市計画局『上賀茂 町なみ調査報告』 1978年。
- (40) 『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』 平安中・高等学校 1986年。
- (41) 「平安京右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- (42) 「平安京左京六条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (43) 高橋康夫「3・10 戦国期の京都」『図集 日本都市史』 東京大学出版会 1993年掲載の図をもとに作成した。
- (44) 『京都市遺跡地図』 京都市文化観光局 1986年。
- (45) 「No16トレンチ」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年。
- (46) 「No65トレンチ」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年。
- (47) 「平安京左京三条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年。
- (48) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年。
- (49) 「平安京左京四条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年。
- (50) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年。
- (51) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- (52) 「平安京左京三条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- (53) 「平安京左京三条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (54) 「平安京左京四条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
- (55) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年。
- (56) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- (57) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年。
- (58) 「平安京左京六条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所

1991年

- (59) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- (60) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- (61) 『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和54年度』 京都市文化観光局 1980年。
- (62) 『上杉本洛中洛外屏風』では、室町通りの三条坊門から四条の間に川が描かれている。この川は四条通りで西へ曲がり西洞院川に合流する。
- (63) 「室町殿跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (64) 『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』 同志社大学校地学術調査委員会。
- (65) 1979年調査。『平安京資料選(二)』 調査地南側隣接地で1994年から1995年にかけて実施した調査でも堀を検出した。
- (66) 今谷 明『天文法華の乱 武装する町衆』 平凡社 1989年。
- (67) 註(53)に同じ。
- (68) 「平安京左京三条三坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (69) 『平安京左京四条三坊十三町 長刀鉾町遺跡 平安京跡研究調査報告第12輯』 (財)古代学協会 1984年。
- (70) 「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (71) 堀内明博「京都七条町の復元 考古学から見る」『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす6 平安京と水辺の都市、そして安土、都市の原点』 朝日新聞社 1993年。
- (72) 「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財研究所概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 山本雅和「町並みの移り変わり 高倉小学校遺跡にみる」『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす12 洛中洛外 京は“花の都”か』 朝日新聞社 1994年。
- (73) 「No10 トレンチ」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年。
- (74) 註(52)に同じ。
- (75) 「平安京左京五条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (76) 註(54)に同じ。
- (77) 『平安京左京三条四坊四町』 京都文化博物館(仮称)調査研究報告 第2集 (財)京都文化財団 1988年。
- (78) 註(72)に同じ。
- (79) 複雑な形態の説明として洛中の堀B型式が、市街地全体を囲繞することなく部分的に構築されていた可能性も考えられなくはない。しかし、水流の痕跡からみてもいずれかの堀・流路につながっていたことは否定できない。
- (80) 註(7)に同じ。

中世京都の堀について

- (81) 中井 均「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」『中世城郭研究論集』 1990年。
- (82) 註(8)～(10)に同じ。
- (83) 内城の位置については、南北に長い長方形をとる説と南西側に張り出しを推定する説がある。
- (84) 註(9)に同じ。
- (85) 「平安京左京一条三坊(1)」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
- (86) 「平安京左京北辺二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- (87) 「平安京左京北辺三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年。
- (88) 註(41)に同じ。
- (89) 「平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年。
- (90) 「平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
「平安京左京九条二坊2」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (91) ほかに60地点では御土居の割り付けにともなう溝を検出している。
「平安京右京一条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- (92) 伊藤 毅「中世都市と寺院」『日本都市史入門Ⅰ 空間』 東京大学出版会 1989年。
- (93) 中井家旧蔵『洛中絵図 寛永後万治前』 臨川書店 1979年を参照した。
- (94) 確証はないが、それほど未曾有の事態とすれば天文法華一揆を契機としたものとは考えられまいか。